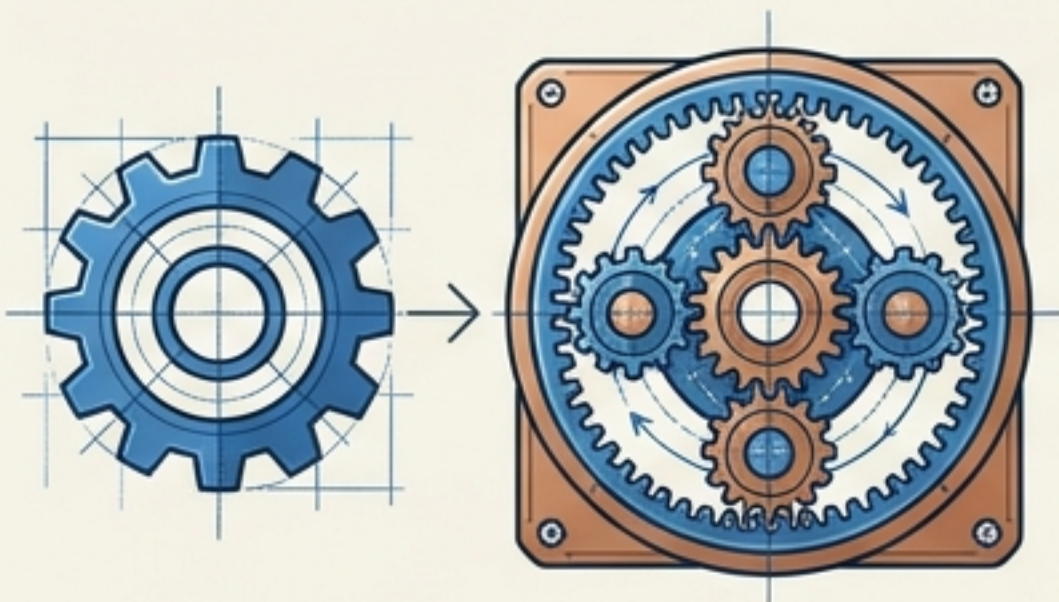


知財AIオーケストレーションの設計図

生成AI導入の「後半戦」を制する、マルチエージェント統治と指揮者の役割

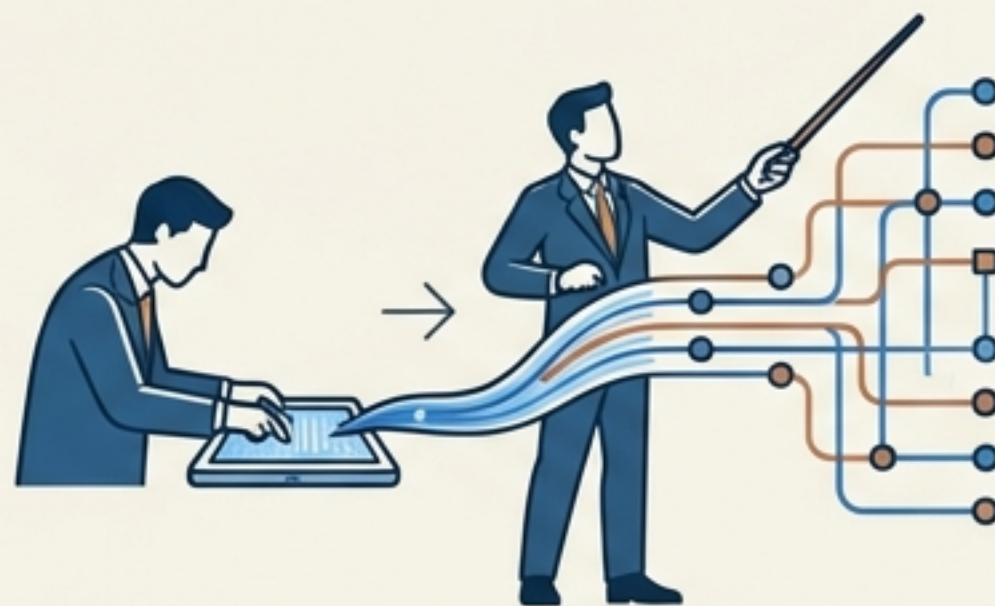
オムロン 奥田武夫氏の提言に基づく知財組織の次世代戦略

生成AI活用のボトルネックは「モデル性能」から「運用設計」へ



構造のシフト

単一ツールの自動化から、複数AIエージェントの統合（オーケストレーション）へ。



役割のシフト

プロンプトを入力する「奏者」から、ゴールと制約を定義する「指揮者」へ。



統治のシフト

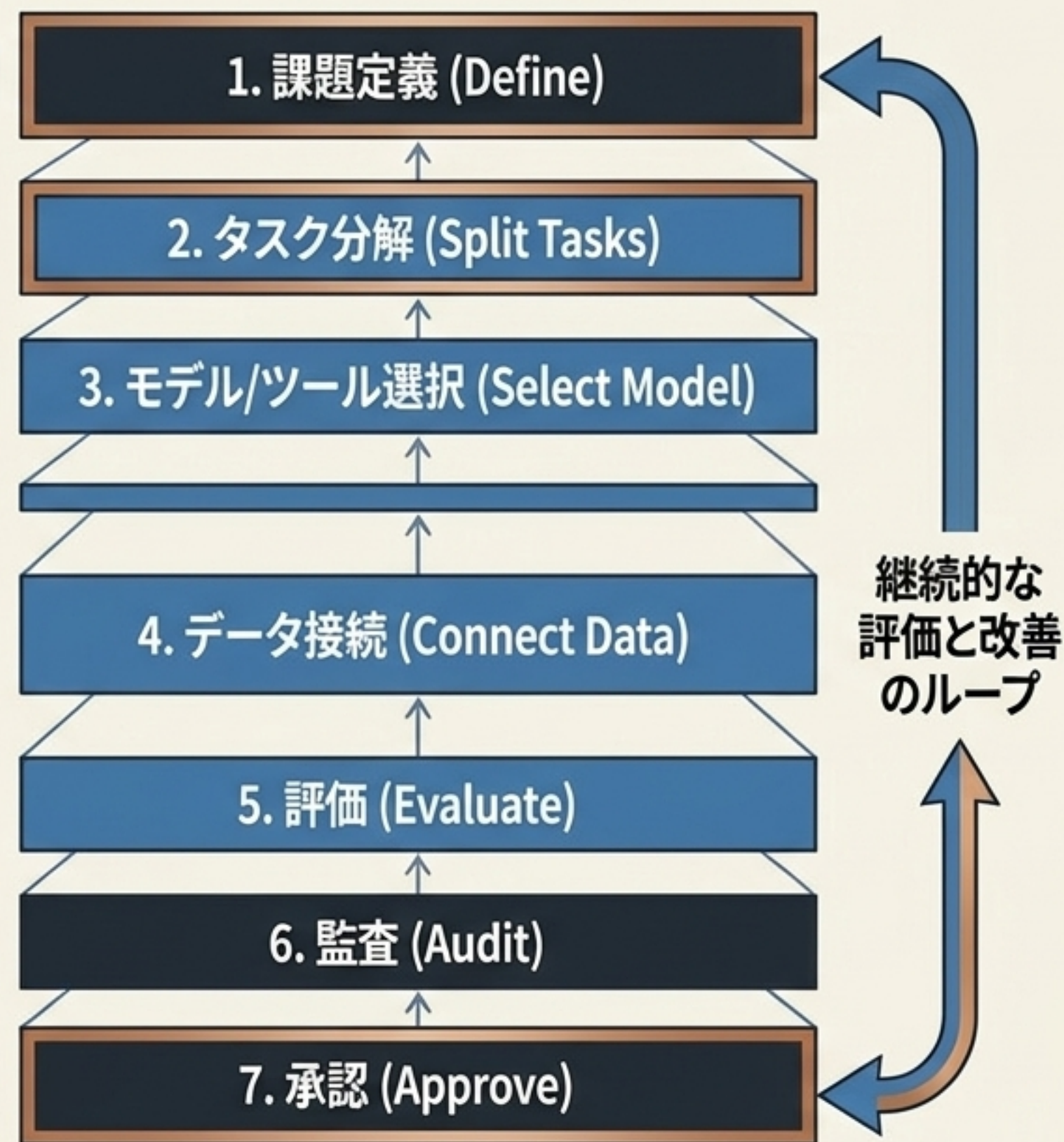
出力結果の鵜呑みを脱し、評価ループと権限管理を埋め込んだHuman-in-Command (HIC) 体制の構築。

知財AI導入:「前半戦」から「後半戦」へのパラダイムシフト

	前半戦	後半戦
 アプローチ	個別業務の自動化 (Copilots)	業務連鎖の再構築 (Orchestration)
 人間の役割	プロンプト職人 (奏者)	目的・成功条件の設計者 (指揮者)
 評価対象	単発の対話・出力品質	複数エージェント間の連携と最終成果
 限界要因	AIモデルの基礎性能	組織のAIマネジメント・設計力

「知財AIオーケストレーション」 の7つの構成要素

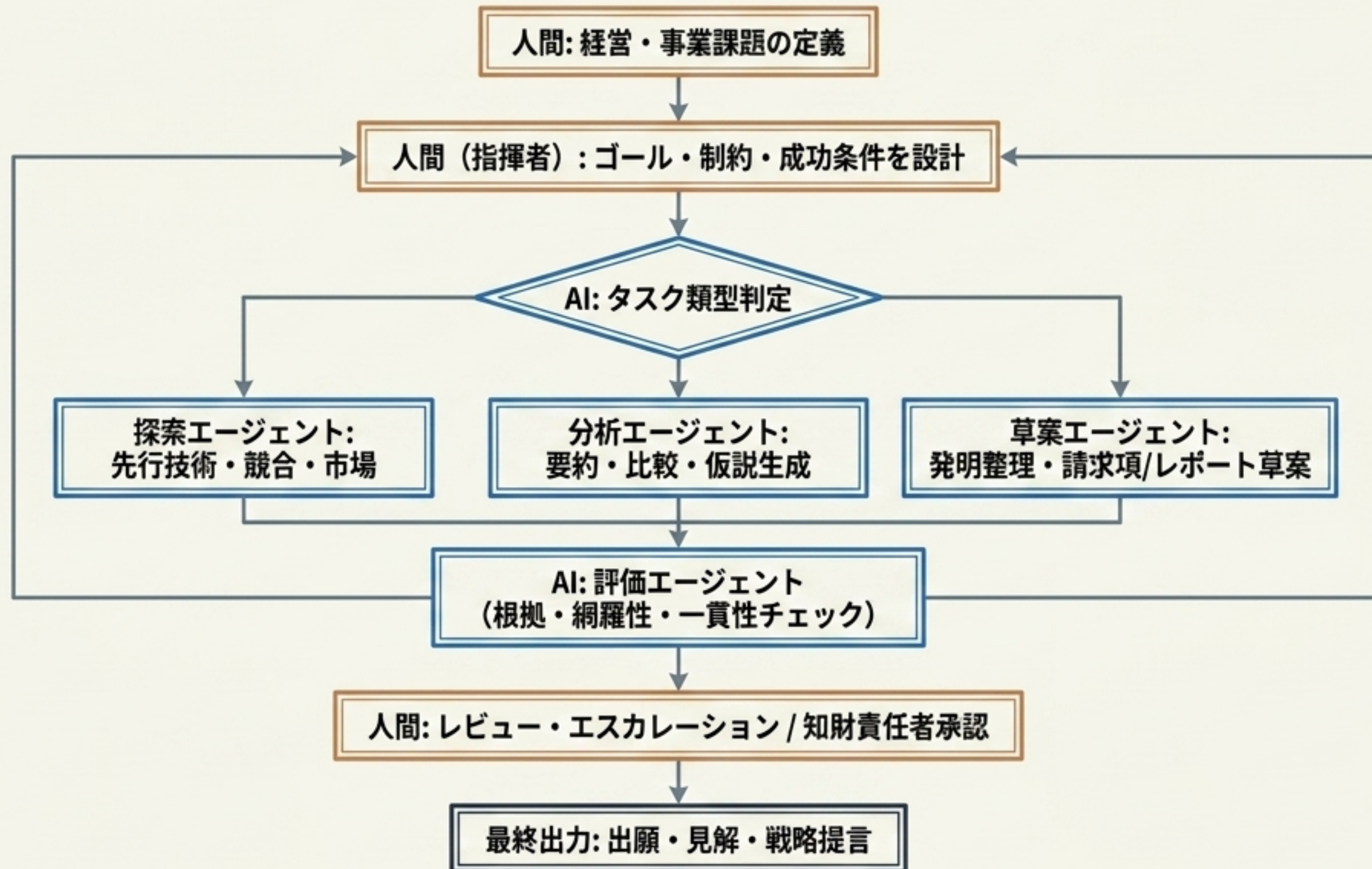
知財業務を複数の
AIエージェントに分解し、
共通のゴール、データ接続、
評価ループの下で再統合す
る運用・統治アーキテク
チャ。



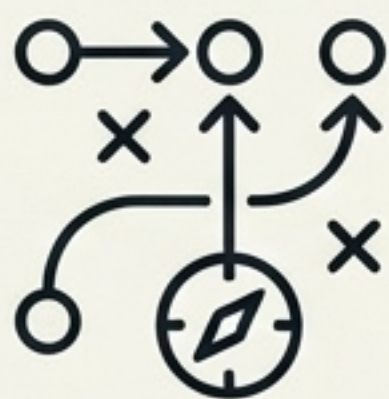
なぜ従来の自動化アプローチでは不十分なのか？

	RPA	プロンプト エンジニアリング	個別の Copilot利用	知財AI オーケストレーション
適用範囲	固定手順	単発タスク	個人支援	文脈に応じた編成
例外対応	× 弱い	△ 依存	○ 柔軟	◎ 動的対応
責任分界	明確	曖昧	個人依存	◎ 評価ループ・権限管理
知財的価値	低：事務効率化	中：個人の効率化	中：作業補助	高：仮説生成と戦略連携

オーケストレーション・ワークフローの基本構造



業界を牽引するAIマネジメントの先行事例



NTTドコモビジネス

3C/VRIO分析への統合。特許、市場、競合情報をAIへ投入し、KSFとコアコンピタンスを導く「戦略管制」を構築。



WIPO (世界知的所有権機関)

国際会議における逐語録自動生成と機械翻訳を内製ツールで実現し、既存ワークフローを完全置換。

94%

IBM (AskHR)

人事問い合わせの94%をAIで処理。組織設計そのものを変革するベンチマーク。



Freshfields

Anthropicとの法務AIツール共同開発。高専門職（弁護士）とAIの高度な協働を本格化。

「奏者」から「指揮者」へ：知財人材の新たな要件



奏者 (The Player - 過去)

- 個別のAIツールを使いこなす。
- 細かな手順指示（プロンプト）に固執する。
- 作業の効率化を目指す。



指揮者 (The Conductor - 未来)

- 戦略課題を業務仕様へ翻訳する。
- 複数エージェントに仕事を割り振り、評価する。
- 必要時に人間判断へ戻す基準を設ける。

「細かい指示を増やすことではなく、よい評価系を先に定義できる組織が勝つ」

指揮者のダッシュボード：6つの責任領域

1. 課題設計

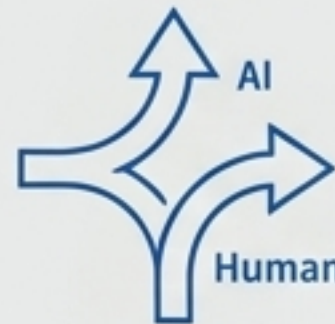
事業課題を知財
論点へ翻訳。



KPI: ゴール明確性, 手戻り率

2. 編成・配賦

探索・分析・草案
をAIと人間に割当。



KPI: コスト/案件, 処理時間

3. 品質保証

ハルシネーション・
文脈ずれの検知。



KPI: 正答率, レビュー差戻し率

4. リスク統制

機密、権限、監査
証跡の管理。



KPI: 機密事故件数, 監査完了率

5. 組織協働

研究・事業・法務
との合意形成。



KPI: 意思決定リードタイム, 採用率

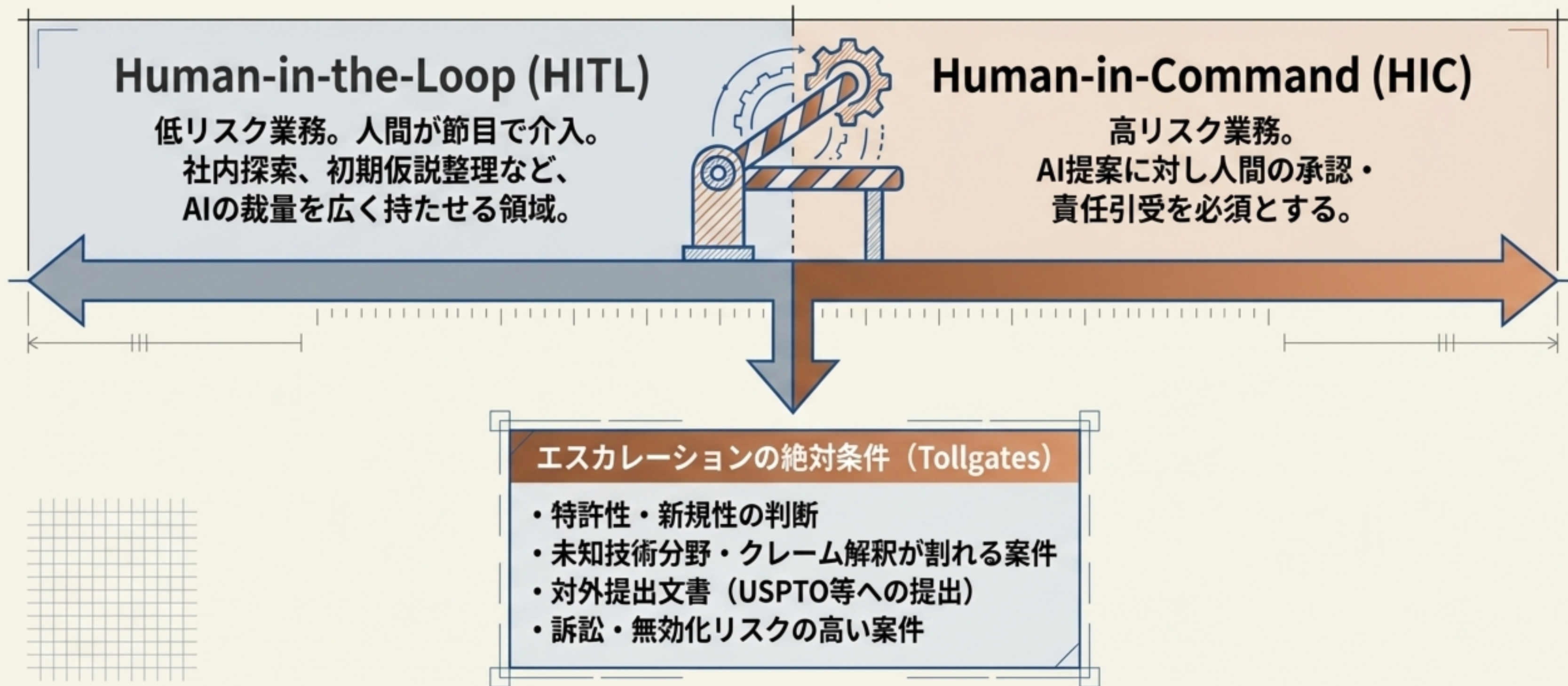
6. 価値検証

調査品質や事業
貢献を可視化。



KPI: 出願の質, 事業貢献額

リスクに応じた権限の可変設計：HICとHITL



「AIがそう言った」の終焉と責任の空洞化

脅威とリスク (The Threat)

6万件超

先端エージェントの公開競技における180万件のプロンプトインジェクション攻撃で誘発されたポリシー違反数。わずか10~100クエリで違反に至るリスク。

建築的対策 (Architectural Mitigations)

権限最小化 (Least Privilege)



エージェントに必要最小限のアクセス権のみ付与。

サンドボックス (Sandboxing)



実行環境の隔離による被害極小化。

監査ログ (Audit Logging)



すべての呼び出しと判断プロセスの永久的記録。

USPTOガイドラインと機密保持の境界線

Rule of Thumb: 社内閉域網、または契約上保護された統制環境での運用が絶対条件

発明者性 (Inventorship)

AIは人間が使う「道具」に過ぎない。
発明者性は人間にのみ帰属し、人間の基準がそのまま適用される。

正確性の検証 (Verification)

AIを用いた出願関連文書作成において、
人間による正確性検証を怠ることは許されない。

機密保持 (Confidentiality)

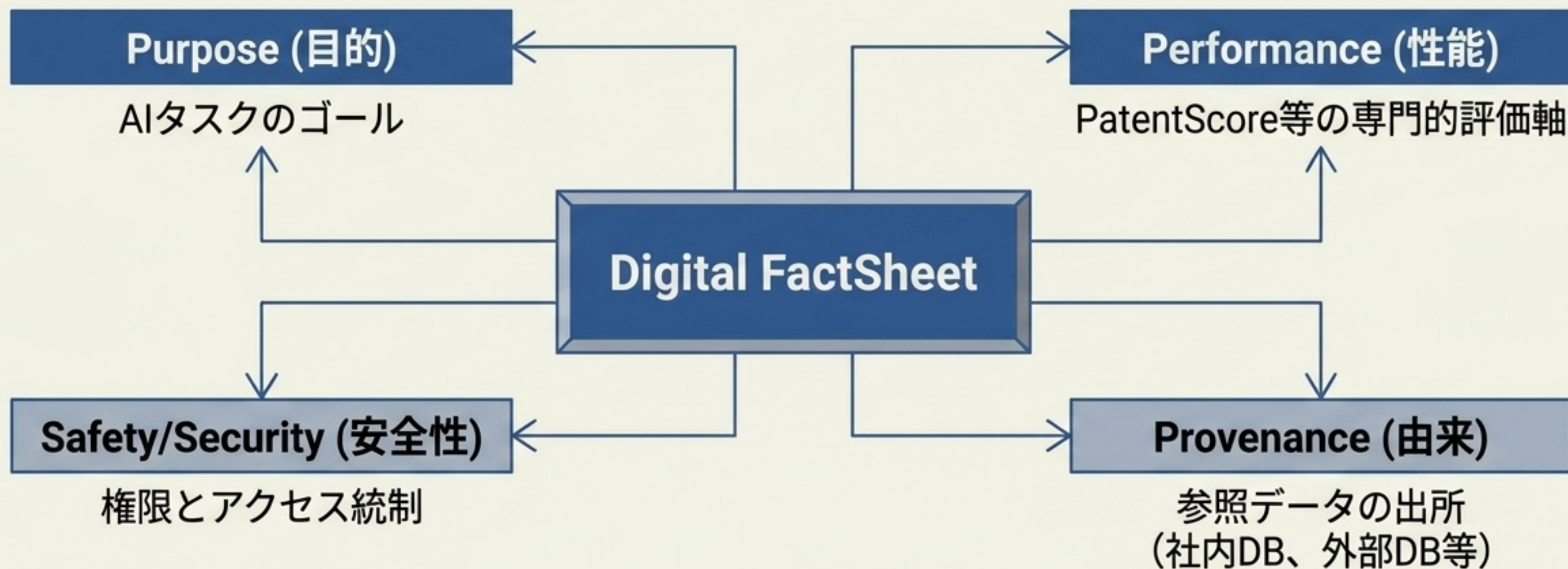
公開モデルへの無差別投入は厳禁。クライアント情報の
入力機密漏洩・国家安全保障上の懸念に直結する。



説明可能性と評価基盤の構築 (NIST / ISO)

NIST AI RMFおよびISO/IEC 42001が求める、信頼性の組み込みと継続的改善。

FactSheetsの実践：「どのデータに基づき、どの評価で、誰が承認したか」を説明可能にする。



知財AIオーケストレーション実装ロードマップ

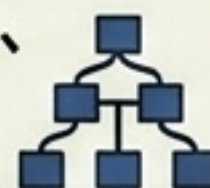
Step 1: 短期 (基盤整備と可視化)

業務棚卸し、タスク危険度
分類、評価セット作成、
承認閾値(エスカレーショ
ン条件)の定義。



Step 2: 中期 (マルチエージェント化)

エージェント編成の最適化、
データ権限分離、監
査ログ・観測基盤の導入、
指揮者の育成。



Step 3: 長期 (戦略ハブ化)

事業・研究・法務を横断する
「知財戦略ハブ」への昇華、
AI管理システムの定着、
知財ROIの可視化。



到達点：知財部門を「経営の戦略ハブ」へ

知財AIオーケストレーションの真の価値は、単なる業務効率化ではない。膨大なデータをAIが高速処理し、人間（指揮者）がそれを結びつけることで、知財部門は「コストセンター」から「戦略の結節点」へと進化する。

